2017年4月9日

中原キリスト教会

　　　　　　　　　　　　　　**「レビ記：主の例祭」**

聖書箇所：レビ記　23:1-14

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　本日はモーセ五書の三番目の文書であるレビ記からです。お読みいただいたのはレビ記でも後の方です。全部で27章あり、その第23章ですから、最後から5章目です。ではその22章まではどのようなことが記されているのでしょうか。そもそも、レビ記の「レビ」というのはイスラエル12部族の一つであるレビ族の「レビ」です。このレビ族と言うのは特別な部族です。預言者モーセや祭司アロンの部族で、イスラエルの宗教的な事柄を任せられた部族です。イスラエル12部族はそれぞれ嗣業地と称せられる土地を主なる神からいただきますが、レビ族だけはそれぞれの部族の嗣業地の中に一部土地が与えられ、そこに住んで、イスラエルの民の宗教的儀式を行ったりする役目を果たしました。当時は、宗教指導者が裁判的なことも行っていましたから、これらレビ人は民の中に在ってトラブルの解決にも携わっていたと考えられます。そのレビ族が宗教的・社会的判断・行為をするときに従うべき基準を記しているのがレビ記です。この書物の中心はいかにすれば主なる神の意に添うことができるか、であり、「聖なる」ものを保つということです。まず、礼拝においての「ささげ物」はどうあらねばならないか、について述べています。焼く尽くすべき「全焼のいけにえ」、小麦粉、油、乳香を奉げ物にする場合どうしなければならないかという「穀物のささげ物」、神の怒りを静め神との和解を齎す「和解のいけにえ」、が記されています。4章からは「罪のためのいけにえ」をする場合の適格者、贖罪をすべき罪の具体例、いけにえ、にできないものについて、具体的罪過を犯した時どうすべきか、等について述べています。7章の最後まで続きます。お話をするときりがないくらい、いろいろあります。

　8章から10章までは祭司は祭儀に際し、どのような身なりでなければならないか、とか、いけにえ、を捧げる時、祭壇の前でどのような業・動作をしなければならないか、などについて記述されています。アロンの子のナダブとアビフがやり方を間違えて死に至る話が出ています。10:1-2です。「さて、アロンの子ナダブとアビフは、おのおの自分の火皿を取り、その中に火を入れ、その上に香を盛り、主が彼らに命じなかった異なった火を主の前にささげた。/すると、主の前から火が出て、彼らを焼き尽くし、彼らは主の前で死んだ」とあります。「香を盛る」のは大祭司、ここではアロンにしか許されていないことをした、とか祭壇の上の火ではなく一般の火を用いたのではないか、と推測されています。実は酔っ払っていたのだと言う言い伝えもあるそうです。いずれにしても死んでしまったため、アロンの他の2人の子エレアザルとイタマルが後を継ぎます。このうちのエレアザルがレビの祭司の家系を継いでいきます。その数百年後の子孫がイスラエル初代の王サウルに油注いだサムエルです。

11章から16章までは汚れについてです。食物規定です。なにを食べてよいか、何を食べてはだめか、という話です。11:3-4には「動物のうちで、ひづめが分かれ、そのひづめが完全に割れているもの、また、反芻するものはすべて、食べてもよい。/しかし、反芻するもの、あるいはひづめが分かれているもののうちでも、次のものは、食べてはならない。すなわち、らくだ。これは反芻するが、そのひづめが分かれていないので、あなたがたには汚れたものである」となっています。ラクダ、豚、うさぎ、クジラがダメです。海のものではエビ、カキ、タコ、イカはだめです。牛肉はオーケーですが血がついているビーフステーキはだめです。フランス料理のカタツムリ、鯛の活造り、親子どんぶりもだめです。鳥でもとび、はやぶさ、からす、だちょう等だめなものが沢山あります。親子どんぶりがだめなのは親と子を一緒にしたらダメということが理由です。そもそも創世記1:29「神は仰せられた。「見よ。わたしは、全地の上にあって、種を持つすべての草と、種を持って実を結ぶすべての木をあなたがたに与える。それがあなたがたの食物となる」と書かれており植物のみ食べることを赦されている、と解釈できる箇所もあります。ユダヤ人には菜食主義者も居ます。レビ記では母乳類、鳥類、魚類等食べてよいものもありますが、その制限はかなり厳しいです。合理的理由はありません。このようなことは職のタブーと言われ世界中で見られる現象です。ヒンドゥー教では牛は聖なるものであり、食べるなんて絶対だめです。しかし、最近ではインド産でなければ牛肉オーケーという人もいるそうです。ご存じのようにイスラム教もこの点は厳しく、殺し方とかいろいろ制約があるようです。これでオーケーとされたのが「ハラール」と言い、最近ではインドネシア人などを想定しハラール食品を表示して売っている、という店が日本でも出てきているそうです。ユダヤ人の場合はオーケーになったものを「コーシェル」と称しています。イスラム教とユダヤ教では共通部分が多いです。このコーシェルの考え方の延長で、ユダヤ人は遊びやスポーツで狩りをすることが禁止されています。このコーシェルは日常生活の場面でユダヤ人の特色を守るという役割を果たしてきました。民族的独自性が守られたのはこれによるところも大きかった、と思われます。ユダ民族とはユダヤ教徒のことだと定義するしかない、といわれますが、ユダヤ人のユダヤ人たる所以を守ってきた、と言えます。日本人は食物においてなんでもあり、で有名な民族です。島国で自らの民族的独自性を誇示する必要性がなかったからでしょうか。キリスト教はユダヤ教と異なり、宗教的意味での食物規定は廃棄しました。それでも初期のユダヤ人キリスト者はこの規定を守っていたと思われます。異教徒への宣教に向かった時点で食物規定はいわれなくなったのだと思います。しかし、欧米文化の中には、クジラやイルカを殺すことへの拒否感があります。ペリー来航の頃はアメリカの漁民は盛んにクジラをとっていたのですから、今のようなクジラ漁全面禁止の風潮は理解に苦しみます。日本も、正論とは言いつつも、いい加減意地をはるのをやめたほうが良いのかものしれません。

食物規定のあとには汚れの代表としてツァラアトについて記されています。ツァラアトというのはついこの前まで「らい病」と訳されていた言葉です。新共同訳聖書やフランシスコ会訳では「重い皮膚病」と訳されています。口語訳聖書では「らい病」と訳されていましたが、この聖書で言うツァアラトは現代のハンセン氏病とは異なる病気のようだ、ということになり、新改訳聖書第3版で、ヘブル語そのままの発音でツァアラトと訳すことにしたとのことです。新約聖書でも「らい病」と訳されていた言葉がありますが、そちらもツァアラトと訳されています。ギリシャ語ではレプラと言います。英語では癩病のことをこの言葉から派生したleprosyが使われてきました。ツァアラトやレプラを癩病と一緒にしては困りますので、癩病やleprosyを使用しなくしたのです。聖書のツァアラトの症状を見ると確かに癩病の症状と違っていて、ツァアラトは単に白い瘡蓋（かさぶた）の出てくる皮膚病に過ぎない、ようです。しかし、遺伝する可能性がある、と考えられていたようで、一定期間隔離状況に置いたようです。病気そのものが大変な病気である、というより、宗教的な意味で「汚れ」を示すものなので、特別に忌避する扱いがされた、というもののようです。私は、白い鱗（うろこ）のような瘡蓋（かさぶた）がでてくる皮膚病というのだから「白鱗皮膚病」（白い鱗の皮膚病）とでも言ったらどうか、と思っています。新共同訳は「重い皮膚病」と訳していますが、聖書を見る限り、病気としてそんな重い病気ではないと思います。誤解を与えます。今言うハンセン氏病もこの白鱗皮膚病に含んでいるのかは定かではないですがおそらくそうだと思います。そのため、白鱗皮膚病の患者は隔離ということを聖書は言っているのかもしれません。しかし、汚れている、と見られるので、隔離することになっていたのかもしれません。ハンセン氏病自身伝染力はきわめて低いことが解ってきましたし、聖書の記述では「伝染病」として大変な病気であるとは扱われていません。いずれにしろ、レビ記で言っているのは、次のようなことです。この白鱗皮膚病になったら祭司に見せなさい。祭司はこの病気だとわかったらまず、その部分を7日間隔離しなさい。7日後にみて広がっているようなら7日間、その人を隔離しなさい。更に広がれば祭司は「汚れている」と宣言することになります。しかし、慢性的な白鱗皮膚病である場合は汚れてはいるが隔離の必要なし。また、皮膚全体を白鱗が蓋（おお）っていたりするなら、これは安定的状態になっているので、汚れている、の宣言は不要である、と言っています。隔離はされたのでしょう。続けて、白鱗皮膚病が新しい症状を出したり、類似の皮膚病の場合の扱い等々について書いています。新約聖書ではルカ17:11-20にこの病に侵された人の話がでてきます。イエス様によって10人の人が白鱗皮膚病をいやされたが一人だけイエス様の所へ来て感謝しました。その人にイエス様は「あなたの信仰が、あなたを直したのです」という言葉を掛けられた、という話です。伝染病的雰囲気は全くありません。西欧文化のなかで、癩病が神に呪われた伝染病のとして扱われ孤立した施設に強制収容され、隔離され、断種され、患者とその家族は塗炭の苦しみを受けました。日本の場合もそうです。やっと患者への国家賠償がなされましたが、現在、家族への賠償を求めて裁判が起きています。このような偏見をもたれた病気の人々に対し、献身的奉仕をされたカソリックの修道女の働きは、日本のキリスト者はけして忘れてならない、と思います。

このあとは、近親相姦の禁止を始めとする結婚関係に関する規定が続きます。更に神の前に聖なる者であることを保つこと、や律法に反した時の罰についての規定が述べられています。特に性的関係については厳しい規定が示されています。ほとんどは死によって償われなければなりません。死罪とまでは行かなくても、「同族の目の前で彼は断ち切られる」ケースもあります。これは所属の部族から追放されることです。また「その民から断たれる」とされているケースもあります。これはイスラエルから追放される、ことです。どれだけ厳格に守られていたかは解りませんが、イスラエルの信仰は当時としては極めて倫理性の高い宗教であった、ということができます。また、21-22章では祭司自身穢れを避けるために注意すべきこと、供え物においてどのようなものが汚れたものになるのかについて述べています。例えば、祭司は離婚した女を娶ってはならない、と言われています。21:9ではなんと「祭司の娘が淫行で身を汚すなら、その父を汚すことになる。彼女は火で焼かれなければならない」と言われています。牧師は娘を持つと大変だ、なんて考えちゃいます。

そして23章からイスラエルの祭りなどについての記述が始まります。先ほどお読みいただいた箇所ではまず、毎週土曜日の安息日について書いています。ヘブル語ではシャバットと言います。次にニサンの月というユダヤ暦1月15日に始まる過越しの祭りについて書かれています。ヘブル語ではペサハと言います。太陽暦では3-4月です。イエス様の最後の晩餐の時です。過越しの祭りは「種を入れないパンの祭り」とも言います。そして、収穫の刈り入れの時として、祭司のところでささげ物の祈りをしてもらわねばならない、ことが書かれています。過越しの祭りの頃は年二回の最初の収穫の時期です。収穫の初穂の束を主に向かって揺り動かす動作をするようです。これは過越しの祭りの最初の日の翌日、即ちニサンの月の16日の祭儀ということになります。このあと7週間、50日後に、七週の祭りという奉献の祭りがあります。小麦粉にパン種を入れて焼かれるもの、小羊、雄牛、雄羊の全焼のいけにえ、初穂のパンなどを奉げることになっています。この七週の祭りはヘブル語ではシャブオットといいます。キリスト教ではペンテコステの日に対応します。ペンテはギリシャ語で7ですから七週の祭りの日のことです。そして、ユダヤ暦7月1日は新年です。7月はヘブル語ではティシュレーと言います。ユダヤでは1月と7月の2回新年があります。社会的には1月が、宗教的には7月が新年と言えます。ユダヤ暦7月は太陽暦では9-10月です。アメリカでは国家予算の開始や学校の新学期は9月1日ですが、ここから新学期が由来していると想像されます。この新年の祝いの10日、即ち7月10日は贖罪の日です。ヘブル語ではヨム・キプールと称し、ユダヤ人にとっては極めて重要な祭りです。23:26-32に記されています。「ついで主はモーセに告げて仰せられた。/「特にこの第七月の十日は贖罪の日、あなたがたのための聖なる会合となる。あなたがたは身を戒めて、火によるささげ物を主にささげなければならない。/その日のうちは、いっさいの仕事をしてはならない。その日は贖罪の日であり、あなたがたの神、主の前で、あなたがたの贖いがなされるからである。/その日に身を戒めない者はだれでも、その民から断ち切られる。/その日のうちに仕事を少しでもする者はだれでも、わたしはその者を、彼の民の間から滅ぼす。/どんな仕事もしてはならない。これは、あなたがたがどこに住んでいても、代々守るべき永遠のおきてである。/これは、あなたがたの全き休みの安息である。あなたがたは身を戒める。すなわち、その月の九日の夕方には、その夕方から次の夕方まで、あなたがたの安息を守らなければならない」とあります。これは悔い改めの日ですから、断食をします。ニネベの悔い改めにちなんでヨナ書が読まれます。また罪を犠牲の山羊（やぎ）スケープ・ゴートに負わせるということで、鶏（にわとり）を頭の上で振り回すカバロットという儀式もあります。続いて、同じ月7月の15日からの1週間を仮庵の祭り、というのがあります。これは秋の収穫祭です。出エジプトのときそまつな庵にとまったことを思い出して祭りを祝うので仮庵の祭り、と言われています。ヘブル語ではスコットと言います。出エジプト記23:16では「初穂の刈り入れの祭り」と言われています。そもそもは収穫祭であったことが解ります。太陽暦では10月の始めになりますので、アメリカ、カナダでのThanksgiving Dayに対応すると言えるかもしれません。アメリカでは11月の第4木曜日ですがカナダでは10月の第2月曜日です。例の七面鳥を食べる日です。本当かどうかわかりませんが、清教徒がアメリカにわたって最初の年、食べ物がなく、大変死者がでたりしてひもじい思いをしたが、翌年は、インディアンに教えてもらったトウモロコシ栽培などで食べ物を得て、この日、インディアンを招待して収穫を祝ったと言う話があります。子供の学校では必ずこの話をします。

レビ記に記載されているイスラエルの祭りは以上ですが、この内、過越しの祭り、その後の七週の祭り、そして秋の収穫祭仮庵の祭りの３つがイスラエルの三大祭りです。キリスト教風に言えば、受難週、聖霊降臨祭、感謝祭ということになります。実はユダヤ教での祭りはもっとあります。仮庵の祭り最後の日の翌日がシムハット・トーラーと言って律法の日です。1年間、日々読んできたモーセ五書の最後の日です。創世記の最初と申命記の最後を同時に読むそうです。この祭りの根拠は律法の解説であるタルムードにあります。次の祭りはハヌカと呼ばれているものでユダヤ暦9月25日で「光の祭り」と言われています。BC166年、ハスモン家のマッカビー・ユダが指導し、エルサレムを占領し、神殿礼拝を停止させたアケメネス朝シリアの王エピファネスの支配を打ち破り、ユダ王国の独立を成し遂げた日です。これは聖書の外典マカベア書に詳しく載っています。このハヌカには子供たちがプレゼントをもらえる日ですので、特に子供が待っている日です。ユダヤでは通常7本の枝のメノラーという燭台を使いますが、この日の燭台は特別で、８つの枝と9本の台が付いている燭台です。この日は太陽暦では11-12月に該当し、キリスト教のクリスマスの少し前になります。最後がプリムです。これはユダヤ暦12月14日の祭りでエステル記の祭りです。バビロニア捕囚時代に王妃となったユダヤ人女性エステルが、王の部下がユダヤ人全部の抹殺を企てているのを知り、王の部下であり、エステルの育ての親であるユダヤ人モルデカイが忠実な働き手であったことを王の思い起こさせ、ユダヤ人抹殺計画を止めさせる、という物語です。それを記念した祭りです。この日には子供たちは仮装します。カーニバルのようなお祭りです。ハローウィーンにも似てる、かもしれません。この絶滅から逃れたエステル記の話は例のナチスのユダヤ人絶滅計画を生き延びたユダヤ人の歴史と照らし合わせてみると何とも複雑な心境です。

ユダヤ人の祭りについてみると、イスラエルの歴史に関連し、それを記憶に留め起き、年に一度想起し、主なる神の恵みに感謝する、というのがほとんどです。それは今、自分たちを生きながらえてくださっている主なる神への感謝でもあります。私はこれを過去の現在化と言っています。過去において恵みを与えてくださった主なる神は今も働き選ばれた民イスラエルに恵みを与え、導きを与えている、という確信なのです。レビ記の祭りは今のユダヤ人社会に生きて働いています。現代の私たちも同様です。受難週からイースターへ、聖霊降臨と教会の誕生日のペンテコステ、秋の収穫を祝うThanksgivingの日、がユダヤ人の三大例祭に対応しています。これらの祭りを通して過去、神様が我々に恵みを賜ったことを想起し、現在の恵みに感謝するのです。キリスト教の場合、クリスマスがもう一つあります。時期的にはユダヤにおけるハヌカの頃になりますが、想起する過去の出来事は異なります。もう一つ、私たちクリスチャンの場合は洗礼記念日というのも忘れられません。私の場合は1971年5月30日、ペンテコステ礼拝の時でした。これはユダヤ教で言えば、「過越し祭」です。罪の奴隷からの脱却の日です。やはり、過去の自分とその洗礼の祝いの時を想起し、今の、恵みの下にあることに感謝したい、と思います。祈ります。

（ご在天の父なる御神様、本日の主の御言葉、ありがとうございます。イスラエルの民に定められた律法の定めと、イスラエルの民が守るべきものとされた例祭について概観いたしました。私たちにも教会に定められた例祭があります。この祭りを通して過去の恵みの時を思い起こし、現在、働いていらっしゃる主の恵みの業に思いを致すことができるよう導いて下さい。我らの救い主イエス・キリストのみ名により祈ります。アーメン）